

巡検報告

鬼 無 里 巡 検

時 村 童 子

10月1日から4日にかけて、浅海先生・栗原先生の御指導による鬼無里巡検が行われた。

長野県上水内郡鬼無里村は、人口3,000人余の典型的過疎山村の1つであるが、地氾りの起こりやすい地域であることや、鬼女紅葉伝説などでも知られている。丁度、9月初めの長野県西部地震での王滝村の大崩落について連日報道されており、鬼無里でも7月末に豪雨による土砂崩れがあったということで、心配は全くないということではあったが、一同、おそろおそろの出発となった。

鬼無里は、長野からバスで1時間程、裾花川沿いの細く曲がりくねった道を揺られていった所にある。道中、バスに乗り合わせた人々はほとんどが老人ばかりで、過疎地域に来たことを実感した。

午後1時半、まず徒歩で、第三紀の砂岩泥岩互層や、小鬼無里の慢性地氾りの跡等を見学した。地氾り地らしく、山深い鬼無里でも多くの水田が見られる。その昔は、桑・ホップ・タバコが多く見られたそうだが、今はもうほとんど残っていない。

初日は早々に切り上げ、バスで上流へ7km程の国民宿舎へと向かう。途中、西京を過ぎたあたりから、流木や切れた堤が見えた。7月の豪雨の爪跡である。

2日目、宿舎付近の流木・流失田を見た後、松巖寺で和尚さんから鬼女伝説についてお話を伺った。鬼無里には、西京・二条・加茂神社等、京都にちなんだ地名が見られるが、これは紅葉によりつけられたものだという。また伝説には2つの説があり、鬼無里では悲劇の才媛であるが、隣の戸隠では悪女とされており、興味を持った。

今度はバスで大望峠へ。足元に広がる村と一夜山・北アルプス連峰が一望のもとに見わたせる。一夜山の採石場を見た後、まだ30歳位の牧場主の説明を聞く。4年前から仔牛を飼い始めたそうだが、何よりも驚いたのは、土地の人ではなく、松

本からこの地での酪農を志して鬼無里へやって来たということであった。

天神川に沿って一之坂へ。豪雨の時崩れた地点である。崖に沿った道路は崩れ、流木がいっぱいで、豪雨の激しさがしのばれる。流木が出たのは初めてで、根の浅い人工材が崩れたものという。自然をうまく利用することの難しさを感じた。

3日目は、昔大崩壊した萩之峰を見学する予定だったが、前夜からの激しい雨のためやむを得ず中止となり、森林組合へ出かけた。40余年の伝統を持つ組合は、過疎に悩むこの村にとって重要な存在である。ブナ・カラマツ等の製材だけでなく、エノキ茸の栽培、山菜の加工なども行われている。収益も順調に伸びているが、組合員の高齢化が最大の悩みだということで、過疎の波に何とか打ち勝ってほしいと願わずにはいられない。

雨も小降りとなり、奥裾花山岳公園へ向かう。溪谷には「猿の水飲場」と呼ばれる大きなポットホールやノジュールなど、奇岩が多く見られる。色づき始めた紅葉の眺めは素晴らしかった。公園内にはブナの大原生林、本邦最大の水芭蕉の群生地があり、いつかまた水芭蕉の咲く初夏に訪れたいものと思った。

夜は、役場の人に説明していただく。観光開発・工場誘致等、過疎対策に取り組んではいるが、徹底したものでないため成果は思うようには上がっていない。その中で、鬼無里の良さに魅かれて住みつくようになった人の存在は実に興味深い。

最終日は森林組合の工場を見学した後、2班に分かれ、農協・役場と萩之峰へ行った。萩之峰地氾り後は、スケールも大きく、地氾り地形がたくさん見られた。

山の自然の厳しさと、それに向かって生きる人々の暮らし。過疎に悩みながらも、乱開発によって鬼無里の良さを失いたくないという村人の言葉が強く印象に残っている。一ヶ村に4日間と、今

までと比べ割合長い滞在であったが、学生時代最後の巡検として思い出深いものとなった。

(10月1日～4日 浅海教官指導)

富 士 巡 検

山 崎 敦 子

1年の筑波以来、私達にとって久しぶりの巡検であった。現在不況の中におかれている製紙業についての実態を探る—というテーマを中心にすえ、7月19日私達は静岡県富士市へと向かった。巡検の要領をいささか忘れかけていた私(達)にとっては、地理科であることを再び目覚めさせてくれたといえる2泊3日であった。

7月19日午前9時30分、富士駅に集合。外に一歩踏み出すと何か異様なおいを感じたが、これは製紙工場によるものだと後でわかり、富士市＝「製紙の町」ということを身をもって認識したのであった。まずは市役所で富士市の概況を伺った。商業については年間販売額を他市と比べてみても、伸び悩みの傾向にあるという。これに対し、紙の出荷額全国一を誇る静岡県の中でも、富士市には多くの工場が集中し、全国一の「製紙の町」を形成しているとのことだった。この地域における製紙の歴史は古く鎌倉時代までさかのぼる。その原因として、良質な水に恵まれていること、原料の木材が近辺に豊富なこと、大市場(東京や大阪など)に近いこと—があげられる。第二次大戦後、特に高度成長期に製紙業が急速に発達した。が、1973年、80年という二度のオイルショック以降景気は低迷して今に至っている。従って生産をより伸ばすこと、また富士山の保全(環境問題)が今後の重要な課題である。以上のような話を聞いた後、市役所の御厚意によるマイクロバスで駿河工業用水道事務所へ。製紙業には莫大な水を必要とし、それまで利用してきた地下水だけでは地盤沈下などの支障を来すため、地下水を制限、かわって工業用水需要が著しく高まったということだった。水の浄化設備を見学したが、幾重にも仕切られた通路を経ることで水がきれいになっていくの

が不思議でならなかった。昼食をとった後、小林製作所へと移動した。研究開発によって独自の新技术を生み出し、海外輸出、技術提携と積極的な姿勢がうかがわれ、さすがは製紙機械メーカーのトップだけあって私達に対する態度も誇らしげな感じであった。この日最後は田子の浦港管理事務所。製紙の原料となるパルプやチップ、石油やセメントを移入、移出は河川による砂利が半分以上を占めているそうだ。夕方近かったせいか、港には活気がなく、もの寂しい気がした。こうして1日目の日程を無事終える。

20日、この日は1日大手製紙業社—大昭和製紙、鈴川工場、大王製紙、新富士製紙—を見て回った。細かいチップが厚い板のような粗野なパルプ材となり、それが何度もプレスされて紙になっていく工程、また紙を綿状にしてからナブキンという製品ができ上がる過程を実際に見学できたのは大変興味深かった。製紙工場は24時間営業であるため、電気消費量が非常に多いと聞き、町全体が製紙のサイクルに忙しく合わされているような感じをもった。市内バスにて帰途につく。

21日、午前中は茶業試験場及び茶業農家を訪れた。静岡と言えばお茶で有名だが、全国的な茶の増殖による産地間の競争に対応し、品種改良、栽培の省力化などを研究、実施しているそうである。やはり茶業の拠点地として品質の良いものを作っていってほしい。午後からは富士宮市内の浅間神社へと向かった。あいにく雨にたたられた上、3日間の疲れがたまったのか、神主さんのお話の時は頭をコックリしている人も結構いた。その後は解散、皆ほっとした表情で列車に乗ったのであった。

今回の巡検は富士市という一地域にスポットを